

2013年度 政治学入門 A 最終試験講評



今回の問題文は下記の通りでした。

「近代市民社会」と「現代大衆社会」の双方について、(1)それぞれが成立した経緯と、(2)それぞれの特徴を、講義の内容を踏まえながら説明しなさい。さらに(3)両者の長所と短所について自ら考えるところを述べなさい。

1. 答案の作成方法について

最初に、どのような手順で答案を作成すべきだったか、私が講義で教授した手順に即して、見てゆきます。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

今回の問題文は、項目番号を打つことにより、解答すべき内容を判りやすく示しています。よって「何を答えるべきか」について、解釈に迷うことはほとんどないでしょう。

ただし2点ほど、気をつけるべき点があります。ひとつめは、(1)と(2)について、「講義の内容を踏まえながら」説明しなければならないところです。近代市民社会と現代大衆社会が、どのような経緯で成立し、またどのような特徴を有しているかについては、さまざまな説や見解がありうるわけですが、この試験で要求されているのは「講義でその点についてどのように説明されたか」です。したがって自分自身の認識や、他の教科書に書かれていたことを記しても構いませんが、少なくとも講義の中で言及されたことには、少しは触れなければなりません。

もうひとつは「説明しなさい」と「自ら考えるところを述べなさい」の違いです。前者は自分の意見を交えずに書けばよいのですが、後者については、解答者（つまり皆さん）の意見が必要となります。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

これについては、講義レジュメの10～11ページを参照して下さい。これらの内容を順序立てて説明する必要がありますが、問題はいかに「取舍選択するか」でしょう。いろいろと細かいことを書き並べると、全体の構成が曖昧になりますので、瑣末と思われる論点は思い切って割愛するのが適当です（具体的には、後に掲げた「解答例」を見てみて下さい）。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

この点については、きちんと段落わけができていないか、全体としてまとまりのある構成となっているか、といった面からチェックしました。思い付くままにダラダラと書き並べたような答案は、当然ながら減点しています。

④実際に答案を書く。

（省略）

⑤きちんと読み直し、おかしい所がないかチェックする。

I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずなのですが、誤字を理由に、減点した答案も少なくありませんでした。もったいない話です。

II. また、日本語として意味が通っていない答案も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。

あくまで推測ですが、講義で「答案の書き方」をきちんと勉強し（あるいは自分で録音などをチェックし）、最初に努力した学生は、それなりの答案が書けていたようです。しかし、これらの努力を怠った（あるいは努力の形跡がまったく見られない）学生については、点数のつけようがない、悲惨な答案が数多く見られました。

2. 期末試験の採点について

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。

→設問は、「近代市民社会」と「現代大衆社会」の双方について、「(1)それぞれが成立した経緯（2論点）」と「(2)それぞれの特徴（2論点）」に関する講義における説明、そして「(3)両者の長所と短所（2×2論点）」についての意見を書け、と指示しています。したがって、それら（全部で論点8点）をすべて網羅しているかどうか、最大のポイントとなっています。

ちなみに多かった誤りのひとつとして、「(2)それぞれの特徴」の部分で、近代市民と現代大衆の特徴を列記したものがありません。もちろんそれも重要なのですが、聞いているのは「近代市民社会」と「現代大衆社会」の特徴ですから、その構成要素である市民と大衆の特徴だけで終わっては、評価の対象になりません。心当りのある人は注意してください。

II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。

→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答えは、大きく減点しました。また、段落わけがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、もう一度、講義の内容を思いだし、「答案構成（設計図）」をきちんとしてから、答案を書き始めるようにして下さい。

III. 分量のバランスがとれているか。

→たとえば「近代市民社会の長所」ばかりに紙幅を割き、それ以外（近代市民社会の短所・現代大衆社会の長所・短所）についてはそれぞれ1行で終り、というのではいけません。つまりそれぞれの論点の分量が、バランスよく配分されていない答案についても、減点の対象となります。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

I. 必要な論点が揃っているか。

本来なら、上記の8つの論点すべてを網羅していない答案は、それだけで0点答案なわけですが、実際には「大幅減点」に留めています。また長所だけで短所が述べられていない（あるいはその逆）ような答案も、論点に欠けるところがあるとして減点しました。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分あるわけですから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下ります。「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなるだけですので、全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。

ちなみに書き終わっていない「未完結の答案」も、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

III. 「基本的なミス」を犯していないか。

たとえば「近代市民社会」と「現代大衆社会」の意味そのものが判っていない答案に、合格点をつけることはきわめて困難です。また、それぞれの特徴を根本的に誤解しているような答案も、基本的な知識に欠けていると判断して、大きく減点しました。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、あまりに酷いものについては減点しました。

こう書くはず、「読めればいいのではないですか」といいたず学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。

またもうひとつ、今年の採点で気になったのですが、「レジュメ形式」や「箇条書きの答案」が、複数枚あ

りました。大学の試験で「論述式」の場合、基本的にレジュメ形式や箇条書きは認められません（一文ごとに必ず段落変え＝改行しているものも含む）。これらは形式違反の答案として、大きく減点しています。そのような答案を書いた記憶のある人は、高校時代の「小論文」を想起して、あのような「論理的な段落わけと、内容的な起承転結のある」文章を書くようにしてください。

- ④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでA評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にAがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、質問票を教務課に提出してもらえば、随時対応します。ただし成績の変更（確認）を要求するのであれば、かならず正式な「成績確認制度」の方を利用してください（直接連絡をもらっても、制度的に対応することができません）。

3. 成績分布について

- ①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布
（政治学入門Aのみの評価）

S : 14.3% A : 7.4% B : 7.0% C : 7.8% X : 32.2% F : 31.3%

（政治学入門全体での評価＝AとBの平均値）

S : 17.0% A : 10.4% B : 12.2% C : 7.8% X : 20.9% F : 31.7%

- ②最終試験受験者における成績分布

（政治学入門Aのみの評価）

S : 20.9% A : 10.8% B : 10.1% C : 11.4% X : 46.8%

（政治学入門全体での評価＝AとBの平均値）

S : 24.8% A : 15.3% B : 17.8% C : 11.5% X : 30.6%

〔解答例〕

1. 成立の経緯

近代市民社会は、近代初期の絶対王政を市民革命により打倒することにより成立した。具体的には、17世紀から18世紀にかけて発生した、イギリスの清教徒革命と名誉革命、アメリカの独立戦争、そしてフランス革命が、ここでいう「市民革命」にあたる。一方、現代大衆社会は19世紀の後半から20世紀初頭にかけて、市民社会に変化が生じたことにより成立した。具体的には「普通選挙制度の採用」「工業化の進展」「都市化の進行」「マス・メディアの発達」などがその背景にあった。

2. 両者の特徴

近代市民社会の構成要員たる「市民」とは、「教養と財産（と余暇）」をもった人々と定義される。彼らは理性的な行動や判断を期待しうる、同質的で理性的、主体的な存在であった。そして彼らが作り出す市民社会において、そこで形成される「世論」は、つねに妥当性を期待しうるものであり、したがって世論（民意）に基づく政治も、適正で妥当な政治となることが期待されていた。

一方、現代大衆社会を構成する「大衆」は、情緒的、非合理（非理性）的で、外部から操作されやすい人々と考えられる。彼らは一時的な感情に動かされやすい存在であるため、世論もまた、しばしば感情に流される。よって彼らが作り出す大衆社会も、しばしば非合理的な決定を下し、そのため社会全体の福利が損なわれるような政治となることも少なくなかった。

3. 両者の長所と短所

近代市民社会の長所として挙げられるのは、政策判断をする市民が冷静で合理的であることから、上記のように「適正で妥当な政治」が実現する可能性が高い点である。しかしその一方で、参政権を与えられる人々は、莫大な財産などを有するごく一部のの人々に限られるため、そこから排除された貧しい人々の利益が政治に反映されないといった短所も見いだされる。

現代大衆社会の長所は、近代市民社会の短所の裏返しにあたる部分といえる。すなわちすべての成人に選挙権が与えられることから、社会の構成員全体の利益が政治に反映され、その利益が守られやすい点である。かたや、大衆は上記のように感情に動かされやすい、非合理的な存在であるため、彼らの判断により左右される政治もまた、非合理的で大局を見失ったものとなりがちである。

以 上

※これはあくまでも「解答例」であり、この通りに書かねばならないわけではない。